

## 就職活動中の学生の否定的自己レイベリング

——その社会的要因の検討——

東京大学大学院／日本学術振興会 井口尚樹

### 1 目的

この報告の目的は、大卒就職活動における学生の心理的負担の実態と要因を明らかにすることである。就職活動中の学生の負担については、本田（2010）が研究の必要性を論じているが、心理的負担の内容や、それを引き起こすメカニズムについては十分明らかにされていない。これを解明することは、適切な支援や対策を考えるのに有益であるとともに、どのような社会的条件が個人に劣等や羞恥の意識をもたらしやすいかについての議論の発展に貢献すると考えられる。

### 2 方法

そこで、民間企業への就職活動をした経験を持つ大学生へのインタビュー調査を行った。非構造化面接法を用い、対象者の経験について自由に語らせた。この報告では特に、対象者達の心理的負担についての語りに焦点を当てる。

### 3 結果

分析の結果、心理的負担の要因として、選考を通過できない際の否定的自己レイベリング（自己の人格への否定的評価の当てはめ）があることが明らかにされた。企業の不採用という限定的な出来事から、否定的自己レイベリングが起こる要因としては以下の4つがあった。第1に、曖昧な選考基準は、不採用の原因を自分の一部の特徴に局限化することを妨げ、自己全体に帰責させやすくしていた。また、何が理由で不採用となったかを判断できないことが、改善への見通しを持ちにくくさせ、恒常的な自己への帰責をさせやすくしていた。第2に、同学年の学生が一斉に活動を行う中、選考を通過できないことが、他者と比較した劣等意識をもたらしていた。学生の間で、新卒での就職活動の結果は重要なものととらえられており、一部の対象者は、遅くまで内定が決まらない時、同世代の友人と会うのを避けるようになっていた。第3に、不採用通知が短期に度重なることで、単独の選考の結果に対してはとりうる、合わなかっただけ、次は通る、といった限定のレトリックが、用いにくくなっていた。第4に、過密日程により、活動中は他のことを考えたり行ったりすることがしにくくなり、就職活動結果が自己認識全体を左右しやすい状況となっていた。否定的自己レイベリングは、活動への意欲や自信を減退させ、一部の対象者は活動を中断したり、進路を変更したりしていた。

### 4 結論

以上から、選考基準が不明瞭で、過密日程の中一斉に行われる、日本の就職・採用活動のあり方が、学生の心理的負担を生じさせやすくさせていることが明らかになった。また、否定的な出来事が否定的自己レイベリングをもたらしやすい条件として、その出来事だけを意識せざるを得ない状況、出来事の要因を状況・時間的に局限化しにくい状況、出来事による結果が社会で重要なものとみなされ他者との比較を伴いやすいこと、が示唆された。

### 文献

本田由紀, 2010, 「1章 日本の大卒就職の特殊性を問いなおす—QOL問題に着目して」 荻谷剛彦・本田由紀編, 『大卒就職の社会学—データからみる変化』 東京大学出版会, 27-59.